

樹の下に迷へるか永却小臈の迷をば解脱するには術な
 きや無情を悟る心には此の世は仮の宿なしか余は彼女
 も余と同じ運命に泣く者にや慰も慰は千々に乱れて果
 敢なて冥想に耽る事暫し涼風一陣身にしみて漸く我に
 かへりて眺むれば桂輪皎々として余を笑ふが如く又悲
 しむが如く打よする波の巖に碎くる泡沫さおわらぬの
 運命に似たるなり夜色漸く沈々として渾濁は彼間に隠
 顕し星は天高く澄みて風露肌に冷なり



和歌

千早ふる神も危やうとたれまきん

身近乃秋の色ふりかきかふ

△ 生

俳句

水桶に金魚のようちみぢかふ
はきよせて捨つるもおしきもみしかふ

△ 生

祖師堂の縁に憩ふて月見かふ
木乃中々衣ひらひらニ三人
秋の月に机上に落つる紅葉かふ
柿の木の下に小供の五六人

中三 小林貞宜